

タイトル	遂行的矛盾と自己達成予言：日本人論の知識社会学： 中間考察2
著者	犬飼，裕一
引用	北海学園大学学園論集，120：I-XIX
発行日	2004-06-25

遂行的矛盾と自己達成予言

——日本人論の知識社会学…中間考察2——

犬 飼 裕 一

目 次

1	はじめに
2	取り扱いの変化
3	われわれとかれら
4	双方向オリエンタリズム
5	理解するのが難しい話
6	困った話、あるいは自己矛盾の再生産
7	意図せざる結果
8	風評被害、あるいは自己達成予言
9	「日本人」への自己鍛錬、あるいは遂行的矛盾の循環

(以上、二一九号)

(以上、本号)

6 困った話、あるいは自己矛盾の再生産

私の妻の死にあたって、私が私自身の権利において所有している奴隷が自由を得ることが私の意図であり要望である(ジョージ・ワシントンの手記から: Henry Wiencik, *An Imperfect God: George Washington, His Slaves, and the Creation of America*, New York 2003, p.4)

われわれは、日常生活のなかで他者を客観化して時間を過ごしているわけで、悪口も一つの客観化なのです。悪口は他者をその特性の一つ、彼のひそかに隠しもったえり好みの一つに還元してしまいます。他者をいわばその客観的真相に押し込めてしまうのです。(ピエール・ブルデュー『社会学の社会学』、田原音和監訳、藤原書店一九九一年、一一七頁)

「ジレンマ」という言葉は、通常の用語法では互いに矛盾しあう複数(ジレンマという言葉の語源がそうであるように、多くの場合二つの

課題の間で果たしてどれを(どちらを)選択すべきなのかを迷う状態のことを意味する。それはしばしば行為の停止状態を暗示し、行為が停止される原因は、特定の選択が他にありえた選択肢を失わせたり、状況悪化させたりすると考えられることにある。鋭く対立しあう二つの利害を同時に担ってしまった主体(個人あるいは集団)は、しばしば両方を放置するが、こういう状況のことを「自己矛盾」と呼ぶこともある。

ジレンマは知識社会学において非常に興味深いテーマである。古典的な知識社会学は知識がどのような社会的条件によって成り立っているかを考えてきたが、ジレンマは知識が反対に社会的条件を拘束している事例となりうるからである。ただし、社会学の他の領域でもジレンマに対する関心は存在してきた。「日常生活の研究」を掲げる流派の社会学は、日常の些細な相互行為に注目することで、より大きな社会システムや社会制度につながる問題の糸口を発見しようとする。日常的に繰り返されている意識的な行為や、そうではない行動は、その背後に普遍的な構造を宿しているという信念がここにある。それが可能であるのかどうかは別として、日常生活の研究は「普遍的な構造」について何らかの探求を行ってないければならない。そうでなければ、無数の人間によって無限に繰り返されている行動の事例が無目的に記述されるだけになってしまうからである。

例えば、コンサート会場や映画館で、上演中にがさがたと音を立てる人物に間近に遭遇すると、一つのジレンマに突き当たることになる。「うるさいから静かにしてください」と当人に向って注意すれ

ばよいのだが、距離が離れているときには注意する自分の声のほうが出ている騒音よりも音が大きくなってしまうのである。当然のことながら、より多くの人々に迷惑が及ぶことになる。迷惑な行為を止めさせるための行為が、もっと迷惑であり、「うるさい」という声が最もうるさいというジレンマに直面してしまうのである。そして多くの場合、人々は「うるさいから静かにしてください」という言葉を発するのを停止(躊躇)する。結果として「儀礼的無関心」と呼ばれる都市生活特有の作法が継続されることになる。映画館でも、満員電車やエレベーターの中と同じく狭い空間に見ず知らずの人間が押し込まれ、快いとはいえない一時的な生活条件を互いに無視しあうことによって耐えているわけである。

これは非常に卑近な例ではあるが、多くの人々が日常的に出会うジレンマの事例として興味を引くものである。特定の反省すべき逸脱行為を指摘する行為そのものが、同じ規範で計ってもさらに一層逸脱している場合、行為者はしばしば自己矛盾に陥っていることに気付いて行為を停止するのである。

ただし、より複雑な行為(行動)を観察する場合には、行為者にもそれに対面する他者にも感知できないジレンマが含まれていることがある。とりわけ複雑な命題の複雑な組み合わせからなる文献の場合には、冷静な態度で読むならば互いに矛盾しあっている命題がほんの数行の文章の中に共存していることがある。

アメリカの医学者・進化生物学者で「人類史学者」でもあるジャレド・ダイアモンドは一九九七年に刊行されるやたちまちベストセ

ラーになり各種の賞を受賞した『銃・病原菌・鉄』の中で次のように書いている。

今日、人種差別 (racism) は、西洋世界で公には否定されている。しかし、多くの（おそらく、ほとんどの！）西洋人は、個人として、あるいは無意識のうちに、依然として人種差別的な説明を受け容れている。日本やその他多くの国々では、人種差別的な説明がいまだ何の言い訳もされないまま、まかりとおっていたりする。アメリカやヨーロッパやオーストラリアの社会では、高等教育を受けた白人でさえも、話がオーストラリア大陸のアボリジニのことになると、アボリジニ自身に原始的なところがあると考えている。（倉骨彰訳、草思社二〇〇〇年、上、二五頁）

本稿の読者にはそれほど多くの説明は必要ないであろう。またこの文章を最初に目にしたときの筆者の衝撃にも、驚いて原書を取り寄せて原文を確認した行為についても同意していただけるだろう。これを別の言い方にとすると、西洋人は人種差別を公には追放しているが、日本などの非西洋諸国ではいまだに人種差別が大手を振ってまかり通っているのだということになる。西洋とは異なつて日本ではいまだに悪しき人種差別が横行しているというわけである。素朴な直感的印象として、これ自体が人種差別なのではないだろうか。

さらに「高等教育を受けた白人でさえも……」という文章が続いているところを見ると、「白人」（とそれ以外の区別）というのがこの著者にとっては、「個人として、あるいは無意識のうちに、依然として」自明視されているようである。「高等教育を受けた白人」という複合概念は、二つの二分法枠組みによって都合四つのカテゴリー

を成立可能にする。すなわち、一、「高等教育を受けた白人」と、二、「高等教育を受けていない白人」、さらに、三、「高等教育を受けた非白人」と、四、「高等教育を受けていない非白人」である。さらにいえば、この場合の「高等教育を受けた白人」というのは、それ以外の三つのカテゴリーを排除した概念である。そしてそれに続く文章に登場する「オーストラリアのアボリジニ」という概念の性質を考えてみると、それが四番目の「高等教育を受けていない非白人」の代表として取り上げられていることが推測される。しかも、この文章は一番目の「高等教育を受けた白人」と四番目のアボリジニ（「高等教育を受けていない非白人」）を最も距離の遠い集団であるかのように書いている。一番目から四番目までを仮に一種の数直線と考えるならば、日本に代表される「西洋」以外の国々というのは、あるいはそれぞれ線上に固有の定数を与えられて配列されているのだろうか。もちろんこのような推測はあくまでも解釈の次元の問題であり、著者の意図とは別物である（ことを祈りたい）。

興味を引くのは、人種差別を批判することを当然の課題として提示しているこの文章そのものが、一体となつた「西洋」とそれ以外、とりわけ「日本」の間の差別を露骨な形でおこなっていることである。² 念のために確認しておく、この本は日本社会の状況を主題として取扱っているわけではない。もちろん日本社会に蔓延する「人種差別的説明」を具体的な事例を挙げたり、統計を駆使したりして論難しているわけでもない。³ この本の目的は、本稿がここまで論じてきた「日本人論」の続きを書くことではなくて、「人種差別」を含んだ世界史や人類史を否定し、西洋中心ではない人類史を打ち立て

ることにある。現に、この本の「日本語版への序文」では、

本書は、私の同胞であるアメリカ人にとってよりも、日本人のみなさんにとってより親しみやすい内容ではないかと思う。それは、人類史全体を説明しようとする本書の試みが、東アジアや太平洋地域の人類社会、つまり日本に地理的に近い国々の歴史の経路に重きをおいているからである。(同書一頁)

と書いている。親しみやすいのかどうかは「日本の読者」の各々の主観の問題だが、冒頭の「プロローグ」からいきなり「日本」が悪しき人種差別が蔓延する社会の筆頭として登場するのは奇怪であるといわなければならない。

差別を批判する文献がそれ自体として差別的であるという自己矛盾(ジレンマ)の見事な事例がここにある。しかも「差別者」という事実上の中傷語そのものが差別の手段として使用されているのである。再度最初の引用に戻るならば、当人も「西洋人」の一員として当人の言葉に忠実に「個人として、あるいは無意識のうちに、依然として人種差別的な説明を受け容れ」、しかも再生産しているのではなからうか。この点でこの一文は首尾一貫しているともいえよう。論理の輪が閉じ、人種差別とともに人種差別的な説明も循環し、再生産されていく。まさに自己矛盾の再生産である。

人種差別を批判する人物が人種差別的な思考様式を抱いているという事例については本稿でもすでに詳しく論じてきた問題である。『銃・病原菌・鉄』の著者にも当てはまるように、当人は本当に直截な態度で「人種差別」を非難するのだが、非難が熱心になればなる

ほどますます人種差別が深くなっていくというジレンマが観察できた。そのおかげで少なくとも本稿の筆者はダイアモンドが掲げる人種差別非難と、この文章で現に登場している人種差別のはたしてどちらを信じてよいのか困難を覚えていたのである。ジレンマの原因は、簡単にいえば方法にあった。そもそも「差別者」と「被差別者」を一刀両断して一方を非難し、他方に対して共感するといったやり方は、それ自体が差別の入口なのである。このためルース・ベネディクトの事例で観察してきたように、「アメリカ人」と「インディアン」を一刀両断して後者に共感し前者を批判するといった立場から、「西洋人」と「日本人」を一刀両断し、前者を一体であると考え、後者をいかかわしい異国趣味の対象に仕立ててしまうといった立場に瞬時に移行できるわけである。『銃・病原菌・鉄』の場合も、「西洋」を一体であると考え、他方で「東アジア」や「太平洋地域」の社会が一丸となってそれに対立するものであるとみなしている。結局のところ同じ方法で書かれた同じ構造の人種差別が再生産されてしまっているのである。

こういった事例はいうならば自己完結した形の人種差別的言説であるといえる。つまり言説それ自体が差別(あるいはその直接の原因)を含んでいるのである。そのおかげでこれらの類型に属する言説は、ここでおこなってきた引用が好例であるように、テキストそれ自体を根拠として人種差別を論証することができるのである。⁴

7 意図せざる結果

どうやら人間は、自分には欠点が充分にないと思うらし

い。わざと幾つもの変な性質をこれ見よがしに装って、欠点の数をふやしている。そしてそれを実に大切に育てるから、しまいは生まれつきの欠点のようになって、自分の力で治せなくなるのである。（『ラ・ロシュフコー箴言集』、二宮フサ訳、岩波文庫一九八九年、一三八頁）

好い民話には、すくなくとも私は三つの要素を数えたい。第一、仮令^{たと}どんな荒唐無稽な話やエロチックなものが書かれてあるにしても、それが真率な無邪気さで取扱われていること。第二、人間の大きいところばかりでなく、その愚かなところや卑しいところにも関心の深いこと。第三、読者に深い興味を与えるばかりでなく、また人生の智慧をも与えるものであること。（島崎藤村「民話」、十川信介編『藤村随筆集』、岩波文庫一九八九年、一一九頁）

これに対して当人自身は人種差別的な命題は提示していないにもかかわらず、結果として人種差別的な言説の再生産に参加してしまうという事例もある。各種の賞に輝いた事例に続いて、今度は長年にわたって名著として読みつがれてきた学術書から事例を取り出すことにする。

他国民と相互作用を行っているうちに、かつて一九五〇年代、六〇年代にいわゆる「醜いアメリカ人」がおかしたのと同じ過ちを、日本人もおかすことになるかもしれない。また、知らないうちに、少数の日本人が「異文化間コミュニケーションに関わる罪」をおかしてしまい、そのため日本人全体についての否定的なイメージが作りあげられてしまうかもしれない。結局のところ、ある民族についてのこうした否定的なステレオタイプは、一人か二人の不注意な行

動がもとになって生ずるのである。（K・S・シタラム『異文化コミュニケーション 欧米中心主義からの脱却』、御堂岡潔訳、東京創元社一九八五年、三頁）

これはインド生まれのアメリカのコミュニケーション論学者K・S・シタラムの『異文化コミュニケーション』（原書一九七六年）の「日本語版への序」（一九八五年）にある文章である。「異文化間コミュニケーションに関わる罪」とは、この本の中軸をなす概念で、文化的背景が異なっているためにコミュニケーションが発信者（あるいは表現者）の意図に反して不調に終わる事態のことである。簡単に言えば異文化間に誤解が生じることである。

シタラムがインドとアメリカという両多民族国家を二つの中心点として次から次へと提示する事例は、この多文化的な経歴を有する人物の真骨頂ともいえるべきものである。例えば、互いの職業について知識をもたないヒンドゥー教徒の哲学者とアメリカのビジネスマンが会話をした場合、「仕事」や「利益」という言葉で互いが理解しあう内容は異なっているのだという。一方にとって「仕事」とは来世のために行う現世での良い行為と関係付けられており、他方にとって「利益」とは毎日におけるビジネスが生み出す利潤のことである（同書四一頁以下）。また別の例では、非常に優秀なある中国人がアメリカの大学の参考司書の職に応募したとき、当人は中国の伝統文化に従って「目上の者」（大学の面接者）の前で沈黙を守っていたのだが、大学の採用担当者は中国人の沈黙を無能さの証拠であると考えて不合格としたとのことである（同書四六頁）。

そして先の引用に続けてシタラムは日本の読者に次のような忠告

をしてくれている。

また、責任を志向する価値システムを持つ文化に生まれ育ったために、非常に個人主義的な価値システムを持つ文化の成員と相互作用を行なう際、日本人は困難を覚えるかもしれない。日本人にはこうした異文化の価値システムを理解し、尊重し、そしてそれに適応する必要がある。そして、さらに重要なことであるが、日本人は他国民が日本人の価値、心情、期待、慣習を理解するのを手助けするべきである。日本人の価値システムには、家族などへの責任、目上の人の権威、自己鍛錬、集団志向、労働倫理、礼儀正しさといった、さまざまな独特の信条があるので、日本人はしばしば外国人に誤解されてきた。(同書四頁、付点太字は大飼)

どこかで見たことがある日本人論の決まり文句である。これまた『菊と刀』である。ここに登場する「さまざまな独特の信条」についてはすでに何度も論じているのでここでは再度の検討は行わないことにする。この「日本語版の序文」が書かれたのは一九八五年であるから、おおよそ四十年後に、しかも「異文化理解」を至上命題として探求を続けてきた研究者ですら同じ議論を繰り返していることになる。さらに少し後の文章では、

おそらく日本人の価値のなかで最も誤解されることの多いのは、社会階層についての日本人の信条であろう。日本人は外国人でさえも、自分たちの社会階層のはしごのなかのさまざまな位置にあてはめて扱おうとする傾向がある。そしてこうした位置づけを行なう際に、たとえその資質において劣っていたとしても、白人のアメリカ人を非白人のアメリカ人よりも高い位置におくことがある。しかし、こ

うしたことをすれば、この両方のアメリカ人を侮辱することにもなりかねない。もう一度言う。自分たちの価値システムを他国民に説明するという責任が、日本人の肩にかかっているのである。(同書四頁)

この文章で注意しなければならないことは、シタラムが「社会階層についての日本人の信条」を改めるように求めているのではなくて、むしろそんな日本人の信念を世界の人々に理解させるように説明する「責任」を強調しているという点である。カースト制度で世界に(悪)名高いインド出身の著者——これ自体がステレオタイプの理解であることは間違いないが——に認定していただくのだから、日本の「タテ社会」(ベネディクト・中根千枝)も堂に入ったものである。あるいは自らがそのような社会をよく理解しているからこそベネディクトの説明が理解しやすいのだろうか。

この場合一つの思考実験をしてみると面白いのかもしれない。それは先のヒンドゥー教徒の哲学者とアメリカのビジネスマンの会話の続編として、アメリカのビジネスマンと日本のビジネスマンに「仕事」や「利益」という言葉で語りあってもらうことである。すると、日本のビジネスマンは、「仕事」と「利益」をそれぞれの身分に応じた責任や自己鍛錬、集団への奉仕という枠組で語り、アメリカのビジネスマンは、それを例によって個人的な私利私欲や栄達欲、功名心で理解するというわけである。日本人はあくまでもどこまでも「滅私奉公」の集団志向であり、アメリカ人はやはり飽きもせず「自由」や「権利」という美名の下に自己中心主義に凝り固まるということになる。そして、これこそが長年にわたって書きつがれ読みつがれ

てきた「ビジネス本」の世界に登場する「アメリカのビジネスマン」と「日本のビジネスマン」のステレオタイプなのである。もしもそうならば、シタラムの努力は結局「ビジネス本」に描かれるいつもの議論に吸収されてしまうことにはならないのだろうか。さらにいえば、これはアメリカのビジネスマンと日本のビジネスマンの両方を差別することにもなりかねないのである。

シタラムが挙げるわかりやすすぎる事例は、多くの読者を説得するという点ではまことに都合なのだが、それぞれの事例が「いかにも」といったステレオタイプであるという問題点も抱えている。この本は異文化間コミュニケーションの困難をきちんと分類し、それらに対する対処法を考えている点は見事なのだが、他方で、この「日本語版への序」そのものもまた異文化間コミュニケーションの事例をなしていることを、あるいは見落としているのかもしれない。シタラムの考える「より良い異文化間コミュニケーション」というのは、煎じ詰めるところ、互いの文化をより深く理解しあうことである。しかし、そのような提言を掲げる著者の「日本人」に対する理解は、残念ながらベネディクトとその時代の水準から出ていないのである⁶。

先に本稿では「人種差別をなくせ」と主張する著者が人種差別を行く例を観察してきたが、ここでは「異文化間コミュニケーションは困難を抱えている」と論ずる著者が異文化間コミュニケーションの困難に実際に直面している事例に出会う。シタラム自身は人種差別的な命題は提示していないのだが、議論を単純化、あるいは実用的なものにしようとする結果、従来からの人種差別的な言説の再生

産に参加してしまっているのである。いうならば意図せざる結果ということになるだろうか。

8 風評被害、あるいは自己達成予言

失敗する可能性のあることは、必ず失敗する（マフィーの法則）

昔日本の母親は世界で一番子育てが上手だといわれていたのに対し、今の日本女性には世界で一番子育てが下手になってしまっています（ラジオの教育相談番組）

コンサート会場で遠くの観客に向って「静かにしてください」と注意することは困難であるのに対し、「人種差別をなくせ」と主張する著者が人種差別を行うことができるのはなぜなのだろうか。理由はいろいろ考えることができる。一つはコンサート会場で騒音を立てる観客に比べて「日本」や「日本人」という対象が複雑であるという事情である。しかも、複雑な対象を取扱いやすい形に単純化する場合、方法を間違えると、本当に「コンサート会場で騒音を立てる観客」と同じような具体的個人の性質・特性を論じる種類の議論になってしまふ。日本の映画館で居合わせた隣の席の人物が、責任を重視する教育を受け、家族などへの責任、「目上の人の権威、自己鍛錬、集団志向、労働倫理、礼儀正しさといった、さまざまな独特の信条」を抱えていることは十分にありうる。ただし、隣の席に座っている一人の日本人がたまたまそうであったとしても、他の「日本人」全般がそうであるかどうかは保証できない。具体的な個別例と

集合概念としての「日本人」は同じような扱うことができないはずである。ここに大半の日本人論が陥っている方法上の間違いがあったことは、もはやくりかえすまでもない。

そもそも、家族への責任感が強く、権威を尊重し、集団への奉仕を重視し、自己鍛錬や労働倫理や礼儀正しさをもっている人物というのとは、おそらくどのような社会においても一定の割合で存在する人物であり、しかも当該の社会において有為の人材とみなされているのではなからうか。他方で、上記の人格描写に用いられている形容詞をすこし変えてみるとどうなるだろうか。例えば、家族中心の縁故至上主義で、権威への絶対服従を自他に求め、集団志向で無個性・無責任、怪しげな偏執を抱き、自分勝手な労働規則に盲従する卑屈な人物といえ、どんな社会でも愛される存在とはなりにくいだろう。

両方の人物像は各々個人について用いられるだけではなく、これまでいくつもの事例で見てきたように「文化」や「国民性」についても用いられてきた。少し考えてみれば、おびただしい数の個人からなる「日本人」が、服を着て町を歩いている単独の具体的な人物のように描写されるというのは不思議な話である。しかしその不思議な話が延々と飽きることなく続けられてきたわけである。

ただし、ここで注意しておかなければならないことは、厳密な学問上の方法や手続きにおいて誤りがあるとしても、漠然とした個人としての「日本人」は日本人論の主役であり、今日でもなお大きな影響力を保持している事実である。日本人論のテキストを読んで、「なるほど日本人はまさにそうだ」と納得する人々は主人公の「日本

人」に対して自ら共感したり、あるいは反省したりすることができるから、この種のテキストを読みたいと思うのである。そして根強い読者層が生まれ、再生産され、メディアの営業は採算があうのである。

この場合重要なのは、不思議な話に対して「不思議だ」「不条理だ」、あるいは「学問的ではない」という感想や論評を表明することではなくて、むしろ日本人論がどのように再生産されてきたのかを考えることである。いかに不思議であったとしても、場合によっては時代遅れであるとみなされているとしても、現にそれらは社会的存在として存在しているからである。他方で、上記の二通りの「人物描写」そのものが星占いの「性格判断」と同じく、形容詞をいじれば多くの人々に当てはまるような種類の命題であるにすぎない。そのような妥当範囲が広い人物描写が「国民性」として繰り返され、定着していくのはいったいなぜなのだろうか。この疑問に答えるためには、日本人論、さらには国民性論一般といった「知識」が社会現象として、あるいは社会的実在としてどのように形成されてきたのかという問題と結合する必要がある。言い換えると、個別の「日本人論」のテキストや、それらを生産してきた少数の人々の問題をより一般的な知識社会学の問題につなげて考えることである。それは今までに社会学理論や方法論といった分野で蓄積されてきた理論的取り組みを具体的な事例に対して応用する作業でもある。

ここからは「日本人論」が普及し、再生産されていく状況を、社会学理論の領域や「イデオロギー論」という名前で呼ばれる領域の議論と接続して考えていくことにする。

「情報化」という言葉が言葉としても情報としても新鮮でなくなった社会にあっても、いまだに新鮮さを保っているのは、「風評被害」という言葉とそれに関する情報である。古典的な例を用いるならば、「……銀行が危ない！破綻する！」という風評が広がると、預けてある預金を引き出そうとする顧客が殺到して、実際には健全経営を誇ってきた銀行ですら支払不能に陥る。「信用の創出」といえば中学生でも知っている基本用語であるが、信用が喪失された場合には、どんなに堅実な銀行でもひとたまりもない。そもそも各国政府がしている嚴重な銀行管理は、互いに相互依存している金融システムが風評被害によって破綻しないことを至上命題として構築されているわけである。別の例を使えば、一九七〇年代のいわゆるオイルショック時代、「トイレットペーパーがなくなる！」という風評が広がると、われもわれもといった調子でトイレットペーパーを買いに走った結果、本当にトイレットペーパーが品切れになる。具体的な事例を離れて、抽象的な意味での「市場」もまた人々の思惑によって高騰や暴落を繰返すのは周知の事実である。

アメリカの社会学者ロバート・マートンに「自己達成予言」（自己成就的予言、self-fulfilling prophecy）という有名な概念がある。「もし人々が状況を現実であると定義すれば、その状況は結果においても現実である（If men define situations as real, they are real in their consequences）」アメリカの社会学者の名前を取って「トーマスの公理」とマートンが呼ぶ原理は、客観的な事実だけではなくて事実に対する意味（付け）が人間の行動に影響を及ぼし、時には事実よりも意味に沿って人間が行動するという傾向を言い現わしてい

る。実は一九四八年に発表された論文⁷でマートン自身が用いているのもまた銀行破綻の事例であった。時は二〇年代大恐慌前夜。現代の日本人にも決して無縁ではない「バブル景気」がわれもわれもといった調子で個人投資家の手持ち資金を飲み込んでいったその時代に、突然、今までとは違う種類の風評が流れ始める。噂が噂を呼び、噂の真相などはどうでもよくなって、われもわれもといった調子で市場から資金が流れ出してしまう。後から理論的な後付けが可能なのか否かは別として、大量の人々と金がどつと押し寄せ、そして去っていったのである。

一九一〇年に生まれたマートンにとって「大恐慌」が印象的な事件であったことは想像に難くない。「永遠の繁栄」と呼ばれた時代が、そう名付けられたしばらく後に崩壊し、健全であると思われた銀行が破綻し、磐石であると思われた経済基盤が崩壊する。原因はどこにあるにせよ、現にどん底というべき状況が出現し、失業者が街路にあふれだす。トイレットペーパーがなくなるくらいならば笑いを誘う挿話でしかないが、いままですら繁栄を謳歌していた社会が大恐慌を来したとなると笑い事では済まなくなってしまう。このことは一九七〇年代のトイレットペーパー騒ぎを経て、八〇年代の「日本の時代」^{ライジンブザン}とその後の崩壊を経験した日本国民にとっても決して他人事ではない。現に目撃した巨大社会現象は、当然それを理解しようとする理論的な取り組みを呼び覚ますことになる。

十九世紀の歴史哲学の後継者である思弁的な包括社会理論と、理論的関心をもたない経験的調査至上主義の両方の立場を批判するマートンは、「中範囲の理論」を提唱した。それは医学がそうである

ような科学としての社会学を志向する立場である。医師は臨床現場で患者の治療に当たっている一方で、抽象度の高い基礎研究にも励んでいる。もちろん両者の間で人的分業が出来上がっているのはいくまでもないが、臨床の経験と基礎研究の理論の間で大きな食い違いが生じることは許されない。「病は治ったが患者は死んだ」では、医学は成り立たないのである。マートンの発想は、例えば「健全な銀行が風評被害で破綻する」という臨床例を、医者のように治療するところまでは行かないとしても、治療の前提となる基礎研究に活用しようとする。つまり自己達成予言の仕組みが理解できていたならば、最初に被害を受けた銀行を元通りに再生させるところまで行かないとしても、同様の事態が連鎖して起こる可能性を劇的に減らすことは不可能ではないというわけである。根拠のない風評が撒き散らされ、個人や組織が被害を受けたり、時には風評を押し付けられた人々が次第にそれに馴染んで自分から風評に合致しようと努めるといった事例は、「症例」として大いに研究すべきであり、一般理論と経験的事実を媒介する「中範囲の理論」の実践例なのである。

それでは本稿でこれまで論じてきた日本人論に「自己達成予言」という「中範囲の理論」を応用するどのような「症例」と「病名」、あるいは「治療法」が明らかになってくるのだろうか。その場合重要なことは、例えば銀行の破綻やトイレットペーパーの品切という事実と、預金を失った顧客やトイレットペーパーを手に入れることができなかった人々の価値判断を一旦切り離して理論を組み立ててみることである。すると、「日本人論」という名前で一括されてきた種々の命題群がどのような仕組み（メカニズム）で成立し再生産さ

れてきたのかについて、何らかの着想のきっかけ（ヒント）を得ることが出来るはずである。

ただし、ここで一つの論点を追加しておかなければならない。それは「予言」がその受け手にとって信じるに値する内容でなければ自己達成予言の仕組みは作動しないという問題である。予言をするのは自由であるが、予言が予言としてまじめに人々に受け取られる過程において、予言者と受け手との間に相互関係が生じるのである。例えば通貨当局が再三にわたって「全体経済（金融システム）に及ぼす影響に鑑みて銀行は一行たりとも破綻させない」「破綻しても預金は全額保証する」という声明を発しつづけており、人々が当局の声明を信じている間は、肝心の銀行がどれだけ多額の不良債権を抱えていても、現に債務超過に陥っていたとしても、「……銀行が破綻する！」という予言は自己実現できないのである。

つまり、これと同じように「日本人論」の言説も、それらがありそうにもない命題ばかりであったならば、自己達成できない場合が考えられるのである。さらにいうならば、日本人論の命題の多くは、いかにもありそうな、誰にでも当てはまりそうな人物像に出発している場合が多いのである。端的にいうならば、「日本人論」を構成する個々の命題は、適用の仕方によっては、どれも「正しい」のである。ここに予言の予言としての生命がある。そんな人間はどこにでも、いくらでも存在するからこそ人々は自分のことだといって勝手に反省したり、嬉しくなったりして同種の予言を受け容れるのである。先に触れた「家族への責任感が強く、権威を尊重し、集団への奉仕を重視し、自己鍛錬や労働倫理や礼儀正しさをもっている人物」

や（その変化形として本稿の筆者が作成した）「家族中心の縁故至上主義で、権威への絶対服従を自他に求め、集団志向で無個性・無責任、怪しげな偏執を抱き、自分勝手な労働規則に盲従する卑屈な人物」という人物描写（国民性論）は、ベネディクトや——直接なのか間接なのかは別として——ベネディクトに学んだ人々の期待に反して、何も「日本人」だけに当てはまることではない。家族への責任感が強いと言われて怒る人物は世界的にも少ないであろうし、権威主義者はどんな社会にもいる。集団に対する態度には個人差があるが、今日の近代産業社会が、過去の社会に比してはるかに集団（組織）に依拠する社会であることはどのような立場の社会科学者でも認める事実である。そして、大企業や官僚機構や軍隊や学校の中で生きる人間が集団生活への適性（協調性）を発達させ、また発達させることを期待されているのは間違いない。集団や組織から逸脱する個人があり、そういう事例が注目を浴びるとしても、近代産業社会に生きる人間が種々の形の大小組織に合わせて自我（アイデンティティ）を形成することは否定できない。むしろ多くの個人が集団に準拠して生活を送っているからこそ逸脱事例が目立ったり、非難されたり、逆に憧れの対象となったりするのである。そもそも個々人の自己鍛錬や労働倫理なくして近代産業社会は成立し得ないし、維持することもありえない。礼儀正しさに至っては、人間が対人関係について考える場合にはいかなる社会のいかなる時代においても問題にならないことなどありえないのである（ついでに余分なことを言い添えておくらば、本稿の筆者は礼儀正しいインド人やアメリカ人も大勢記憶している）。

両方の人物像（国民性）は、特定の国民や民族や地域住民に当てはまるというよりも、どんな社会にも発見できる人物像なのである。そして、後者の「家族中心の……集団志向……盲従する卑屈な人物」というのは、実は罵詈雑言型の日本人論によく登場する「日本人」なのであるが、自著を翻訳してくれた日本人（の代表としての訳者）に好意を抱いているシタラムが描写する「……自己鍛錬や労働倫理や礼儀正しさをもっている日本人」と質的にはたいして変わらないのである。問題は、本人が「事実」であると信じている性質を好意的に評価するか否定的に評価するかの違いでしかないのである。

日本人論をめぐる問題の中で最も重要なのは、以上のようなこの社会の住人にでもある程度当てはまりそうな特性を、「日本人」に該当する人々が自分たちにとって特別な性質であると信じ込んでしまふことにある。それはちょうど占いによくある「性格判断」がどのように受け取られるのかという仕組みと似ている。姓名判断や星占いで「貴方は自己鍛錬や労働倫理に厳しく、礼儀正しい……」と言われて「自分は違う！」と感じる人物はそれほど多くはない。しかし、占いが提供する「貴方の性格」と一般的な「人生論」の違いは、受け手がその人物像を自分だけに当てはまる特別な命題であると信じるところにある。

そして特定の人物像を受け取った人々は、自分（たち）からその人物像に合致しようと努力するようになる。また、場合によってはその命題に合致しない逸脱事例を非難し、矯正しようとすることも考えられる。ここにはすでにもう一つ別の仕組みが働いているように思われる。

9 「日本人」への自己鍛錬、あるいは遂行的矛盾の循環

……私はここでは日本語よりかからないでお話することを試みたいと思っています。ここでは英語だけを使って私たちの対象を理解するという規則をわれわれ共通のものとして立てたいと思います。この自分で選んだ方法は、すぐさま私を、そして私たちを一つの困難のなかに陥れます。私はひとつこれは論理の上ではないけれども統計の上で支持できると思う信念を持っています。それは、英語を話す日本人は信頼できないということです。一九四五年から五年までの米軍による日本占領の時代に、私は、私の出会ったアメリカ人に何度もこのことについて説明しました。従って私としては、日本について私が何を言おうと、私の言うことについても割り引きて考えてほしいという意図をもっていきます。(鶴見俊輔『戦時期日本の精神史 一九三一—一九四五年』、岩波現代文庫二〇〇一年、一二二頁)

それでは日本人論の命題に具体的な個人や集団が合致しない場合はどのように対応するのだろうか。先に指摘したように、占いという言説の要点は万人向きの命題を個別の人物に個々に提供するところにあった。この場合の問題は肝心の概念や概念を組み合わせた人物描写の類が現実の客観的状況やそれまでの自己認識と食い違っている場合である。通常の理解力を持った人間ならば合致しないと判断するような場合においても、当人が合致していると頑強に信じ、それに沿って努力するならば、予言は自己実現される場合がある。家族への責任感がとりたてて強いわけではなく、特定の権威に対してことさらに否定するわけでもないが、積極的に盲従するわけでもない

く、集団に対しても、自己鍛錬、労働倫理、礼儀正しさについてもやはり同じような態度をとっている人物はいくらでも存在する。ところが、こういう人物が特定の状況下でこれらの徳目を強調する「予言」を与えられると、自ら積極的に予言に合致しようとして努力するようにするのである。

当然のことではあるが、予言が実現し、自己鍛錬や労働倫理を尊重する礼儀正しい人物が続々と増えていくならば何も非難する必要はないようにも思われる。予言をするだけでこの種の模範的人物が増加するのならば、ぜひとも予言を続けていただきたいとも言えるだろう。

ただし、問題は「家族への責任感が強く、権威を尊重し、集団への奉仕を重視し、自己鍛錬や労働倫理や礼儀正しさをもっている人物」という人物描写(国民性)が別の側面をもっていることである。すでに先に論じてきたように、特定の人物や集団に対して、当人が「家族中心の縁故至上主義で、権威への絶対服従を自他に求め、集団志向で無個性・無責任、怪しげな偏執を抱き、自分勝手な労働規則に盲従する卑屈な人物」であると言いかせ、説得し、当人が喜んでそれに向って努め励むようになるためには相当な条件付けが必要なのである。

筆者は別稿でイギリスの思想家テリー・イーグルトンの「遂行的矛盾(performative contradiction)」という概念について論じた。遂行的矛盾とは、「人が自分自身の不幸に投資してしまう」仕組みであり、自分自身の客観的状況と矛盾した命題を達成しようと努力したり、必死に守ろうとしたりする現象をいう。そして矛盾した言説

が延々と再生産されていく現象を、イーグルトンは「イデオロギー」と呼ぶわけである。¹⁰ 例えば、世界各国で評価されてきた日本人の芸術家が「日本人には独創性がない」と断言し、長年にわたって各国を股にかけて活躍してきた日本人学者が「外国人には日本人の心は理解できない」と請け合い、一匹狼のフリージャーナリストが「日本人は集団志向である」と宣言する。冷静に観察するならばまことに奇怪な自己矛盾なのであるが、当人はその種の言明をやめようとしないし、難しい理屈をこねて懸命に守り通そうとすることすらある。彼らが考え出す理屈は次第に複雑化し、時には驚くほどの知識や学識を付け加えられて巨大な構造物となっていくのである。¹¹ しかも先に強調してきたように、ここで問題となっているのは一人の日本人ではなくて、集合概念としての「日本人」なのである。仮に当人が当てはまらないとしても、その人物が「自分は例外であるが多くの日本人は……」であると主張したならば「イデオロギー」は反証例をいとも簡単に克服してしまうのである。

イーグルトンの遂行的矛盾とマートンの自己達成予言を合体させて考えると、ここまでの議論はどうなるのだろうか。独創的な芸術家が「独創性がない日本人」について嘆き、一匹狼のフリージャーナリストや外国の大学で教鞭をとる学者が「自分の中に潜む集団志向的な日本文化」について反省したり、自己批判したり、難しい理論を考え出すと、それが「自己達成予言」として作用することが考えられるのである。有名な芸術家や学者やジャーナリスト——ですら——が口をそろえて、独創性がない、集団志向だと言うのだから、それらを「予言」として受取った多くの「日本人」が予言の自己実

現に努力するようになることは、あるいは自然なことなのかもしれない。そして「日本人は西洋人とはちがって集団志向である（独創性がない）」という命題が、元来は日本人に対する批判や反省、あるいは罵倒として用いられていたのが、次第に変化し、「日本人らしくあることは集団志向である（独創性がない）ことである」、あるいは「日本人であるからにはすべて集団志向でなければ（独創性がある）日本人は排除されなければならない」という命題に変わっていくのである。こうして遂行的矛盾と自己達成予言が循環していくことになる。

ぐるぐる回る命題の循環は次第に自動運転に入っていくのかもしれない。例えば「集団志向」や「独創性のなさ」を非難し、反省をうながしたいと思う人物や、「規律を大切にすること」や「集団に対する奉仕」こそが日本人だけの美徳であると勝手に決め付けている人物にはそれぞれの意図や価値判断があるのだが、これとは別に、遂行的矛盾と自己達成予言の循環状態は当人たちの意図を乗り越えて自己目的化していくわけである。いうならば、善悪の判断を超えた次元で「日本人」への自己鍛錬が始まるわけである。

このように考えてくると、ダイヤモンドの近年の本からの引用やシタラムの名著にあつた事例が意図せず日本人論の巨大な循環の一環をなしていることが見えてくる。当人たちの意図が誰一人として悪意ではなく、それどころか多文化の相互理解に生涯をかけているような人物（シタラム）や、人種差別的な世界史を書き換えることに真摯な情熱を注ぐような人物（ダイヤモンド）が、結果として従来から続けられてきた循環構造の一環をなしているのである。献

身的な人々の善意までも食いものにして成長していくイデオロギーの仕組^{メカニズム}がここにある。

予言はだれにでも当てはまりそんな命題を提示し、当人(たち)がそれに向って努力することによって自己達成される。しかも、周囲の人々があたかもそれが当然のことであるかのように繰り返して同じことを予言しているならばなおさらである。ドイツのある有名な政治家が言ったように、どんな嘘でも繰り返していると次第に真実になってしまふわけである。予言としての日本人論の具体的な命題について考えてみれば、このことはもつとはつきりする。アリストテレスが「社会的動物」と呼んだように——理由はどうであれ——人間は集住して生息する動物である。集住・共生の数百万年の歴史の中で独特の作法や流儀に多様性が生じていようと人間から「集団志向」という特性が消滅することはありえない。どんな人間でも己について深く考えればどこかで集団志向にぶつかるはずである。独創性のなさはさらに強烈な命題で、そもそも独創性は珍しいから独創性なのである。どんな時代のどんな社会であつても、独創的な人間は多数者ではないはずである。ところが、こんな自明の命題が、あたかも「日本人」だけの特性であるかのように言いふらされ、哲学風にされ、イデオロギーとして定着してきたわけである。

ここまで論じてきたことを先のマートンの議論に近づけてまとめらばどうなるのだろうか。「日本人には独創性がない」と主張する日本人の芸術家や「集団志向」を反省する一匹狼のフリージャーナリストといった症例^{症例}は、一連の日本人論の言説が「自己達成予言」であると理解されることによって症状の悪化を防ぐことができるか

もしれない。ただし、もつと深刻な症例について考えるきっかけともなるはずである。たとえば「日本人には民主主義は無理だ」といった予言を真に受けて権威主義的体制の復活を願うといった深刻な症例もまた「自己達成予言」の仕組みとして理解できるのである。この社会にでもあるような選挙違反や政治家の汚職に直面しても、日本人論のイデオロギーにとりつかれた人々はそれを「日本人」の特殊性であると信じてしまふ。そして「規律正しい社会」を見覚えのある過去に求めようとするわけである。つまり「日本人は個人が未成熟だ」という命題が「日本人には民主主義は無理だ」という命題に展開し、それが予言となり、そんな日本人にふさわしい制度として「集団志向」や「タテ社会」からなる「日本らしさ」の再興が求められるわけである。

こうしてようやく日本人論の知識社会学として論じてきた冒頭のテーマに立ち帰ることができる。「甘え」「タテ社会」「個の未確立・未成熟」「無責任」「創造性のなさ」、そして「集団志向」さらには「民主主義の適正欠如」といった日本人論(ジャパノロジー)や日本特殊論の決り文句群は、すでに歴史上の過去となつていともいえる。さらに言うならば、経験的な事実に優先する至上命題(イデオロギー)であつたものが、陳腐な過去の遺物へと取り扱いの変化を経てきているのかもしれない。

しかし、その一方でこのような症例が過去に存在したというのは事実である。とある年配の人物が、個人的な会話で日本人論のお決まりの命題を指して、「ああいうのは、昔の知識人の冗談のたぐいで、

言っている当人も信じてはいなかったのだよ！ 若い人にはそれが判らないから怒るのでしょう」と諭してくれたことがある。つまり罵倒的な調子で続けられた自虐文学は一つの時代、いくつかの世代にわたって共有されてきた「冗談」であり、あるいは「建前」であって、「真実」や「本音」は別のところに保持されていたというわけである。ただし多くの人々が真顔で共有しあう冗談というのはいったい何なのだろうか？ そもそも冗談というのは誰に対する冗談だったのだろうか？ しかも冗談を真に受けて笑えない道化を必死に演じる気の毒な人々が大勢いたのである。そもそも、真実や本音を言えないのは誰に対してで、これまたなぜだったのだろうか？

このように考えてくると、太平洋戦争と敗戦、さらにはアメリカによる占領政策の問題が浮上してくることになる。筆者は以前別稿で「甘え」（未成熟）や「タテ社会」（権威主義）、あるいは集団志向といったアメリカ製の差別命題を喜んで身にまとい、「自分の不幸に投資してしまう人々」の問題を、戦時中のプロパガンダと敗戦による精神的外傷と関係付けて論じたことがある¹²。面白いのは同一の言説がアメリカ製のオリジナルと、受容した日本人によって実に巧妙に、念入りに解釈替えされていく様子であった。出発点となる基本前提、例えば「集団志向」「権威主義」「個人の未成熟」に変更はないのだが、修辞（レトリック）上の変更や複雑な哲学的意味付けが附加され、場合によっては大衆社会論やマルクス主義の社会哲学¹³から借りてきた用語まで追加して仰々しい調子の日本人論が何度も再登場してきた。

再度議論の筋道を確認してみると論点がはっきりする。出発点は

ヨーロッパ人が考えた「近代」をめぐる哲学的議論であった。そこで登場してきたのが、個人主義や個人の自律（自立）、創造性、自由主義といった特性を持つとされる「近代人」という理想像であった。「近代人」は実在するヨーロッパ人というよりも、その理想であったが、アメリカ独立戦争（革命）やフランス革命の理念となり、これ以後に急拡大していく「近代市民社会」の理想的人格となってきた。完全に自立した人間や完全に自由な社会関係などというものはありえないし、誰もが特定の問題について創造的であったならば、それは創造的とは呼べない。しかし、その一方で自立や自由や創造を求める人間が「近代」をもたらしたというのは、今ではかなり陳腐になりつつも、否定できないはずである。

他方で、「近代人」の理想をめぐる議論も数百年を経る間に複雑化し、さまざまな社会科学が互いの方法を批判しあうなかで、主に二つの特徴をもった新興社会科学がいくつか登場してきた。一つは、理想（知識）と経験的事実を切り離すことができ、理想（知識）はそれ自体が独立して論じることのできる対象であること。もう一つは、理想（知識）は多様であり、多元的、相対的であって、一方から他方を評価することは不可避であるとしても、できるだけ避けるべきであるという立場である。文化人類学が「未開」という経験的事実と「未開人の思想」を切り離そうとし、精神分析学が「精神病」という経験的事実と「潜在意識」を切り離して、それぞれを独立した研究対象として探求しようとしたのがまさにこれである。しかも「文明」と「未開」、「健常」と「精神病」は単純な二項対立ではなくて、元来は多様で、多元的であり、互いに相対的な価値をもつと考

えられるようになってきた。「近代人」の理想自体も、多様な価値観であり、それ自体が多元的であり、相対的なものであるということになったわけである。つまり、特定の社会や文化が「文明化」しているのか、「近代」に値するか否かという問題よりも、いかなる種類の、いかなる性質をもった「近代」がありうるのかということの方に関心が移動してきたわけである。社会学、とりわけ知識社会学自体がこうした流れのなかで登場してきた学問であることは、あらためて強調するまでもないことである。

ところが、一九四〇年代に起源を発するアメリカ製「日本人論」は、すでに本稿で論じてきたように表面上はヨーロッパ製の難しい用語（文化相対主義や精神分析学や社会学の術語）を用いて装飾に努めているのだが、実際には十九世紀の植民地主義者や人種主義者となんら変わらない議論を再生産していた。まず、アメリカ人すべてとヨーロッパ人すべてを一体のものとし、日本人すべてと対立させる。そして個人主義や個人の自律（自立）、自由主義といった近代人の理想の事実上の反対物（ネガ）として、集団志向や未熟な個人（「甘え」）や権威主義・反自由主義（「タテ社会」）といった「日本人」を考え出したわけである。

これが敗戦後の日本に輸入され、盛んに宣伝されることで大規模な退行現象が引き起こされたことは注目に値する。「退行現象」というのはもちろんそれ自体で特定の価値判断を含んだ表現であり、一九四〇年代のアメリカの学界の一部の人種差別主義者が保持していた文化を、同時代のヨーロッパの学界の文化に比して低水準と呼び、「退行」していると判断することになってしまう。これは間違いなく

特定の立場を表明する言辞である。このことは厳に肝に銘じておかねばならない。そうでなくては価値判断を不注意に混入しているという点で「西洋人」と近代の理想を同一視した日本人論の著者たちと同じことをしていることになってしまうからである。

しかし、二十世紀前半のヨーロッパ人が上記のような社会科学の展開や複雑化を「進歩」とあるとみなし、同時代の日本やアメリカの知識人たちもそれに同意していたところを見ると、「退行」は彼ら自身の問題であつたといわなければならないのかもしれない。つまりベネディクトのような日本人論者自身がヨーロッパの「高度な学問」と自分たちを同一視しようとしていたのだから、仮に当人たちの知的能力に問題があつただけであるとしても、同一の基準で判断される責任は負っているといえるだろう。また、他方で「退行現象」の結果として日本社会が獲得した相対的な文化の「発展」が人種差別言論の再生産からなる自虐世界であつたこともまた事実である。自分や他者が住む社会の現在と過去についてより緻密に理解しようとする努力を停止し、昔の人種差別主義の立場に戻るといふ「文化」が戦乱の狂気の中で登場してきたわけである。

そして、日本人自身やその他の人々による解釈変えの事業が開始される。こういう場所度々登場願うのは気の毒であるが、先のシタラムによる説明は日本人論の解釈変えの実例として見事である。ただし類例はいくらでもある。それらのなかで集団志向は「仲間想い」あるいは「全体への奉仕」と言い換えられ、権威主義は「規律正しい社会」と言い換えられ、個人の未成熟は「慎重深さ」あるいは「自己表現が苦手」と言い換えられ、創造性の欠如は「応用力の

高さ」「改良の才」などと言い換えられる。それは刺々しい人種差別言説をオブラートやカプセルに包み大量の水とともに何とか飲み込む作業であった。

他方で太平洋戦争時の戦時プロパガンダがこうしたオブラートや水の役目を果たしたのも事実であろう。二十世紀の戦時プロパガンダはこの国も共通して「自由」を掲げる一方で、個人の「犠牲」も求める。「総力戦」という言葉を裏切らず宣伝は派手で、勇ましいのだが、どれも勝利を称え、代償となる犠牲は少なく見せようとする。ここに戦時プロパガンダのもつ解釈変え機能がある。大量現象としての総力戦は必然的に個々人の集団志向を必要とするが、軍歌やスローガンの世界では、「仲間想い」「戦友愛」や「全体への奉仕」といった言葉が繰り返される。上意下達の戦時動員体制は権威主義によって成立するが、當時を懐かしむ人々は「規律正しい社会」と呼びたがる。このように戦時プロパガンダは言葉の変換機^{コンバーター}としてはたらく、元来否定的な意味をもっていた概念を洗浄し、誇らしい自称として拡大再生産した。

すでに言い古されてきたように、二十世紀の戦争はプロパガンダの戦いでもあり、勝利すると自由が残り、敗北すると犠牲に眼がいくようになる。そして占領軍とともにアメリカ側の戦時プロパガンダとプロパガンダ製造・普及者が大挙して上陸してきた。そして彼らの靴の中に入っていたのが、ほかならぬ『菊と刀』であった。ここからこの本に象徴されるおかしな知的退行現象が発見したわけであった。

ただし、以上のような歴史的説明には危険性が含まれていることを忘れてはならない。それは何もかもを歴史的事件（この場合は太平洋戦争とその結果）のせいにしてしまう危険である。仮に決定的な原因の一つとなっているのが太平洋戦争と日米両国による戦時プロパガンダであるとしても、すべてをそれに帰することはできない。戦争が終ってから時間が経過していくなかで次々と新たな解釈変えを経て続けられてきた日本人論の仕組みや、それが新しい世代にまで支持されてきた原因については、「太平洋戦争」の一点張りでは何も理解できないからである。これらについて考えるには特定の時期の特定の社会だけに当てはまる問題ではなくて、もっと広い範囲の現代社会に当てはまる問題と「日本人論」を接続して考える視点が必要になってくるはずである。

とりわけ「大衆社会論」と呼ばれる一連の議論との関係が問題になってくるのである。

（つづく）

1 原文は以下のとおり、

Today, segments of Western society publicly repudiate racism. Yet many (perhaps most) Westerners continue to accept racist explanations privately or subconsciously. In Japan and many other countries, such explanations are still advanced publicly and without apology. Even educated white Americans, Europeans, and Australians, when the subject of Australian Aborigines comes up, assume that there is something primitive about the Aborigines

themselves. (Jared Diamond, *Guns, Germs, and Steel*, New York 1999, p.19)

2 本稿の先行部分「ジャパノロジーと人種主義の語り方」、『北海学園大学学園論集』、第一一九号、二〇〇四年、特に「3 われわれとかれら」の章を参照。

3 当人が要約するところによると、この本の主題は、「歴史は、異なる人びとによって異なる経路をたどったが、それは、人びとのおかれた環境の差異によるものであつて、人々の生物学的な差異によるものではない」(同書三五頁)といことであるという。つまり「歴史の異なる経路」の一例として「日本」が出てくることはあつたとしても、現代日本の社会問題を論じているわけではないのである。

4 それだけにダイヤモンドのこの文章を最初に読んだ編集者や英語の原書の読者、さらにはペーパーバック版の読者、そして日本語版を製作した訳者や編集者が、この己完結した差別言説についてなにも気づくことがなかったのかと不思議な気持ちに襲われるのは、本稿の筆者だけだろうか？ 著者が「ミス」としてこの種のことを書いてしまうことは、当人が書いてるように「無意識」であつたとしても、このテキストを取り巻く大勢の人々が著者にこの問題を指摘しなかったという責任は問われなければならない。あるいは、少なくとも著者に直接助言することができそうな人々は誰も彼も何らかの理由でこの問題に気づかなかつたのだろうか。もしもそうならば、その「何らかの理由」について究明することこそが知識社会学にとってはもっとも興味深い課題であるといえる。

5 「さまざまな独特の信条」については、犬飼裕一「菊と刀とコーラとピストル」、『北海学園大学学園論集』第一一八号、二〇〇三年、参照。

6 このことは「異文化コミュニケーション」という包括的な研究領域が抱えているほとんど不可避のジレンマにつながっているのかもしれない。ジレンマとは、1、世界に存在する多様な文化の間の相互理解を促進しなければならないという課題と、この課題を達成するため、2、多数の文化を同じ次元で記述しなければならないという実用上の課題と、他方で、3、それぞれの文化は当然のことながら複雑であり、

そもそも「文化」という単数概念で単純化することは間違っているという経験科学上の命題の三つを同時に充足しようとする場合に生じる。簡単にいえば、実用目的のための単純化と認識上の成果としての複雑化の間に矛盾が生じているわけである。このため「異文化コミュニケーション」の研究者は上記の間の妥協点を見つけようとするわけである。ただし、シタラムが「日本」に関して見つけた(より正しくは、既存のもので間に合わせた)妥協点が「菊と刀」であつたことは残念であるというほかはない。

7 Robert K. Merton, "The self-fulfilling prophecy", in: Merton (ed., Piotr Sztopka), *On Social Structure and Science*, Chicago and London 1996, p.183-201 (森東吾他訳『社会理論と社会構造』、みすず書房一九六一年、三八二―三九八頁)

8 「占い」型の誰にでも当てはまる命題が具体的な社会現象にどのような影響を与えるのかについては、すでにマートン自身が先に挙げた論文で人種差別の問題を論じながら見事に描き出している。自己達成予言という概念が「差別」という高度に知識社会的な問題に適用されると、差別的言説がどのような仕組みで「予言」され、なおかつ「自己達成」されるのかが見えてくる。少し長いが引用すると、

われわれは道德錬金術 (moral alchemy) の簡単でわかり易い公式からはじめるが、それは、同じ行動でもそれを行う人によって評価が異なるという公式である。例えば、有能な錬金術師の手にかかる「しつかりしている (firm)」という言葉も、すぐにうまく次のように程度が下がる。

私はしつかりしているが、

お前は片意地で、

あいつはつむじ曲りだ。

I am firm,

Thou art obstinate,

He is pigheaded.

この科学の技能に練達していない人の中には、同一の言葉が同じ三つの行動の何れに大してもひとしく適用されて然るべきだ

という者もある。そんな非錬金術的なナンセンスは、頭から無視しておこう。

この実験を心に留めておくと、同じ行動でも、内集団のエイブ・リンカーンがした場合と、外集団のエイブ・コーヘンやエイブ・クロカワがした場合とは、評価作用が全く違うことがよくわかるのである。筋道をおって話を進めよう。リンカーンが夜遅くまで働いたことは、彼が勤勉で、不屈の意思をもち、忍耐力に富み、一生懸命に自己の能力を発揮しようとした事実を証明するものだと思われる。ところが外集団のユダヤ人や日本人が同じ時刻まで夜働くと、それは彼らのがむしゃら根性を物語るものであり、また彼らがアメリカ的水準を用捨なく切りくずし、不公正なやり方で競争している証左だとされるだけである。内集団の英雄が儉約家で、つつましく、また貯蓄家であるとするれば、外集団のならず者はけちんぼうで、欲張りで、一文惜しみである。内集団のエイブはスマートで、敏捷で、才智にあふれているから、一から十まで賞められ、外集団のエイブはおなじことながら、すばしこく、ずるく、悪賢くて、余り目先が利きすぎているから、何から何まで軽蔑される。……（マートン『社会理論と社会構造』、上掲訳書三八〇頁、上掲英語版 191-192）

マートンが用いる「内集団 (in-group)」と「外集団 (out-group)」という言葉は、アメリカ合衆国内の文化的（あるいは宗教的、人種的）主流派と少数派の関係を論じるところに出発している。一九四八年、つまり『菊と刀』の二年後にこの論文が発表されていることを考えると、アメリカという国の学界の多様さを実感させられる。しかもベネディクト以降、主に経済の分野に移動して、「エコノミックアニマル」だのなんだのと延々と続けられてきた「倫理的錬金術」による退行現象にもおよその説明がつくわけである。ただし、この問題については改めて論じることにする。蛇足になるが、「自己達成予言」を本稿で論じてきたピッケンやマーガレット・ミードといった人々の昔ながらの古風な議論の仕掛けに応用するのも一興であろう。

9 犬飼裕一「にせユダヤ人が語る「日本」の物語——山本七平と日本人論の知識社会学——」、『北海学園大学学園論集』、第一一七号、二〇〇三年、一五頁。

10 テリー・イーグルトン『イデオロギーとは何か』、大橋洋一訳、平凡社ライブラリー一九九九年、一五頁以下。

11 そんな現象のなかで最も魅力的で忘れ難い事例が、ユダヤ人イザヤ・ベンダサンこと山本七平の多面的大活躍であった。山本の知性は自分が行っている「日本人論」の事業が根本のところまで深刻な矛盾を抱えていることに気付いていたのかもしれない。現にユダヤ人イザヤ・ベンダサンに変身した山本は、「山本七平」の名前で書いている時と調子が異なっていた。より魅力的なのは、もちろん山本七平という万能の「訳者」と一体になったイザヤ・ベンダサンの方である。犬飼裕一「にせユダヤ人が語る「日本」の物語」参照。

12 犬飼裕一「日本人」を語る二つの方法——ルース・ベネディクトとジョン・ダワー——、『史観』、第一四八冊、二〇〇三年、五八頁以下。

13 続稿の議論を先取りすることになってしまいが、本来はもっと一般的、普遍的な問題を取扱っていたはずの議論が、なぜか「日本人論」と合体していく様子は、それ自体興味をそそる問題である。これは、例えば第二次世界大戦をはさんだドイツのフランクフルト学派の議論が、なぜか罵倒型の日本人論に導入（密輸）される状況を考えてよく理解できる。面白いのは、日本人の特性を論じるはずの議論が各国の別の文脈の議論から輸入されてきたという事実である。